

会議名	第8回 自動認識総合展 (AUTO-ID EXPO 2006)
開催日時	平成18年9月13日(水) 10:00~17:00
開催場所	東京ビックサイト(東京都江東区有明3-21-2) 西1・2ホール
主催者	(社)日本自動認識システム協会 (JAISA)
参加人数	物流展などとの複合開催で把握困難。報告者が出席したセッションBは約百名
1. 会議の概要	<p>JAISAが主催する標記の展示会は、9月13~15日に約150社・団体の参加により開催。バーコード、2次元シンボル、RFID(データキャリアシステム。カード状またはタグ状の媒体に、電波を用いてデータの記録、または呼び出しを行い、アンテナを介して通信を行う認識装置)、バイオメトリクス(生体認識)、カード、システムなど今日の自動認識技術・システムの分野を網羅し、「HUMAN&AUTO_ID-効率・安全・信頼---自動認識技術」をテーマに、ユビキタスコンピューティング時代におけるトレーサビリティや物流・流通・、SCM、医療支援、セキュリティなどに必要不可欠な自動認識技術の機器・製品・サプライ応用品、応用システムを一堂に集めた総合展であった。</p> <p>(別添資料参照)</p> <p>セミナーの中から現在の畜産関連自動認識システムと関係の深い、セミナーB(9月13日13:00~15:00)</p> <p>「RFIDを利用したアプリケーション規格」を聴講した。</p> <p>講師 日本自動認識システム協会研究開発センター長 柴田 彰 氏 (実績としてデンソーで品質管理システムの構築に関与、別添資料参照)</p> <p>データキャリアとしてのRFID規格がほぼ完成し、RFIDを利用したアプリケーション規格に重点が移っている。この講演ではサプライチェーンマネジ、コンテナ識別電子シール、位置情報管理などのRFIDについて説明された。主要な話題は、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ISO(国際標準化機構)交渉の裏話。 ・この分野についてのISO規格に関係の深い国内企業間の議論は低調。 ・バーコードシステムとRFIDは今後も共存するであろう。 ・実物系ネットワークの立ち遅れ ・ミドルウェアのコントロール ・高速処理ソフト ・タグの低価格化が必要 ・ICチップの汎用化 ・ICチップ装着の費用を誰が負担するのか、システム構築のための追加コスト負担、などについての議論が必要 ・データベースと共存が必須(DBのない国や分野での自動認識は無意味)
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表	<p>当協会をはじめとする現状の畜産関連会社・機関が独自で畜産用自動認識システムを構築することは技術的にも資金的にも得策ではないと思われる。他分野で開発・実用化されたシステムを見定めて、その中から優れたものを選び連携して技術開発を進めるべきであろう。</p>
3. その他の発表課題で関心のあったもの	<p>会場内のJAISA(日本自動認識システム協会)の展示コーナーに1987年から現在までの「JAISAの歴史・RFID歴史」のパネルが展示されていた。その中に</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1993:畜産技術協会「畜産の未来をひらく電子技術」発行 ・1994:ISO家畜用IDコード制定 <p>が記載されていた。</p> <p>このことは、当協会が行なってきた事業が歴史的、先駆的なものとして評価されている</p>

	<p>ることを示すものである。そして当協会が今後、先進的な飼養管理技術の開発にかかわってゆくためには、J A I S Aとの連携を深める方策が必要かつ得策と思われた。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>この分野関連課題の採択にあたっては、申請課題の世界における自動認識技術開発の中での位置付け、他分野との連携関係について十分留意する必要があると思われる。</p>
<p>5. 会議の所感</p>	<p>I S O自動認識分野の会議の舞台裏話から、これまで感じていたことより格段に各国のエゴが飛び交っていることを感じさせられた。当協会が参画しているI S O 1874, 11785, 14223 を成立させたI S O / T C 2 3 / S C 1 9 / W G 3 はI S Oにおける先駆的なWGと言えよう。</p>
<p>報告者</p>	<p>針生 程吉</p>